

中原遺跡

緊急発掘調査報告書

1986

飯島町教育委員会
中部電力株式会社

序

昭和58年8月から、長野県企業局が与田切川上流に発電所建設に着手し工事が進められてきました。当地籍に中部電力株式会社が鉄塔を建設したため、文化財保護の立場から、飯島町遺跡調査会に委託し、調査を行いました。

縄文中期の遺跡で、この調査に期待が持たれました。その結果、建物の柱穴跡や当時の生活に使われたと思われる、土器が出土しました。これらは重要なものと判断され報告書にまとめました。調査の実施にご理解をいただいた、中部電力株式会社、及び調査団の先生方等関係者のご協力をいただき成果を上げることができましたことは感謝にたえません。

出土品については、今後飯島町陣嶺館に保管し、また一般に展示し、多くの方々に見ていただくよう努めてまいります。

調査報告書の刊行に当り関係各位に対し心から謝意を申し上げる次第であります。

昭和61年3月31日

飯島町教育委員会教育長

幸村 邦彦

例 言

1. 本遺跡は昭和60年度に実施した、長野県上伊那郡飯島町中原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 本報告書は、中部電力株式会社が、送電用铁塔建設工事のため、中原遺跡埋蔵文化財包蔵地の事前調査を飯島町教育委員会に委託して施行した調査である。
3. 本報告書は、一般の方々に解り易くするため、検出された遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述はできるだけ簡略にした。
4. 図・図版の縮尺は、各図に図示した。
5. 本報告書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。

(1) 本文執筆者	友野良一
(2) 図・図版製作	友野良一・小木曾清
(3) 写真	友野良一
6. 本報告書の編集は飯島町教育委員会がおこなった。
7. 本報告書の遺物は飯島町が保管している。

目 次

序	
例 言	
第 I 章 発掘調査の経緯	7
第 1 節 発掘調査に至るまでの経緯	7
第 2 節 発掘調査の組織	7
第 3 節 発掘調査の経過	8
第 II 章 遺跡の環境	9
第 1 節 遺跡の位置	9
第 2 節 地形及び地質	10
第 III 章 遺構及び遺物	13
第 1 節 遺構と遺物	13
(1) 遺構	13
(2) 遺物	16
第 IV 章 所 見	18
図版	
あとがき	

挿 図 目 次

第1図	中原遺跡の位置図（5万分の1）	9
第2図	中原遺跡付近の地形と河川（1万分の1）	10
第3図	中原遺跡の標準序層図	11
第4図	中原遺跡の付近の地質図	11
第5図	中原遺跡付近の遺跡図	12
第6図	中原遺跡の周辺の地形図	13
第7図	中原遺跡の発掘地点	14
第8図	中原遺跡掘立建物址	14
第9図	遺物出土配置図	15
第10図	出土遺物実測図（石器）	19
第11図	出土遺物実測図（石器・鉄器）	20

図 版 目 次

図版1.	柱穴址	21
図版2.	柱穴址調査状態	22
図版3.	出土遺物	23
図版4.	出土遺物	24
図版5.	出土遺物	25
図版6.	遺物出土状態	26
図版7.	石器	27
図版8.	土城、発掘に参加された方々	28

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経緯

本調査は、中部電力株式会社が、送電用鉄塔建設に伴い中原地帯の一角に用地を選定することになり、61年1月18日、中部電力株式会社より鉄塔用地が埋蔵文化財の包蔵地に指定されているため飯島町に現地協議を申し入れたので、日本考古学協会員友野良一氏立合により現地立合をしたところ、本予定地が、埋蔵文化財の包蔵地であることが確認されたので、同年3月中部電力株式会社より、埋蔵文化財の発掘届が提出された。これにより飯島町と中部電力株式会社との間に委託契約がなされ、同年4月22日関係者一同参集し現地で勸入式を行い、同日より調査を開始した。

第 2 節 発掘調査の組織

〔飯島町遺跡調査会役員〕

会長	幸村邦彦	教育長
理事	片桐 修	文化財調査委員
	宮下静男	”
	北原健三	”
	桃沢匡行	”
	松崎研定	”
	片桐佳彦	”
	中島淑雄	”
	小林嘉男	”
幹事	鎌倉金蔵（教育次長）	岩村延昭（総務係長）
	高坂 浩（社会教育係長）	塩沢兵衛（社会教育主事）

〔中原遺跡調査団〕

団長	友野良一	日本考古学協会員
調査員	和田武夫	長野県考古学協会員
	”	片桐 修 飯島町文化財調査委員
調査補助員	横田愛子	飯島町七久保

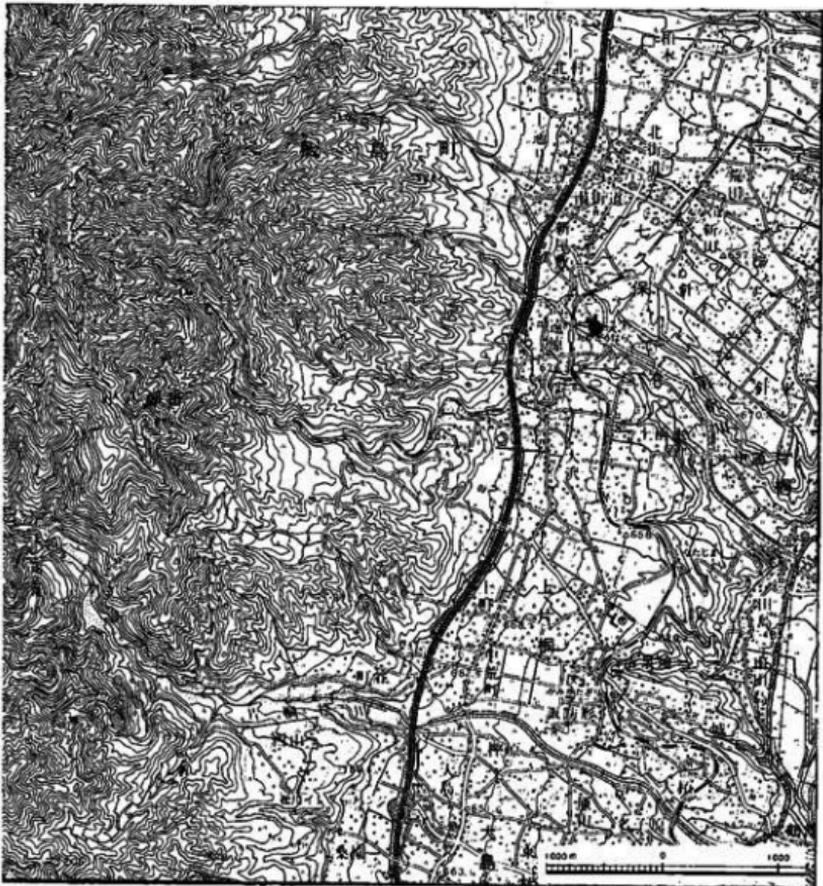
第3節 発掘調査の経過

月 日	日 誌
4. 21	教育委員会で発掘器材の運搬を行なう。
4. 22	中原遺跡の発掘始式、午前10時より現地で行なう。教育委員会より、山村儀和教育委員・幸村教育長・輪倉次長・高坂係長 文化財調査委員、片桐 修・北原健三・松崎研定・小林嘉男・片桐佳彦。 地主、片桐 勲・上山秀雄・横田常平 中部電力・係、小原恒敏 調査団、友野良一・和田武夫・片桐 修・横田愛子 午後より発掘準備作業、伐採、孟宗竹根の掘り取り、立木片付を行なう
4. 23	五味工業のバックにて孟宗竹の株の掘り取り、及び柿その他の雑木の掘り取り。 午後よりテント張り調査グリッドの設定を行なう。
4. 24	今日より本格的に調査をはじめ。一部耕土もあったので、除土する。
4. 26	各グリッドの掘り下げ、土器・石器・鉄製品などが発見される。
4. 28	東西にベルトを設け調査を進める。石器・土器片が検出される。
4. 30	中央南側に集石があり、集石の北側に東西に調査ベルトを設定、内耳輪の破片など出土。
5. 1	北側のグリッドより柱穴址の一部と土壇が発見される。五味工業のバックで集石の除去を行なう。集石の下部に堅く叩かれた面が認められる。集石の下からも柱穴と構が検出された。
5. 2	床面の清掃、写真撮影、遺構の実測、本日で現場の作業は終了する。
5. 3	遺物の整理、後片付。
61.1.20	遺物の水洗、註釈、写測、遺物の写真撮影、報告書作成
61.3.21	編集終了

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

中原遺跡は、長野県上伊那郡飯島町七久保4812、4817番地にある。国鉄飯田線高遠原駅から東北300m、徒歩4分で遺跡に至ることができる。また、県道高遠原から徒歩4分、国道153号線片桐より約2kmの地点に所在する。遺跡標高は659～661mにある遺跡である。

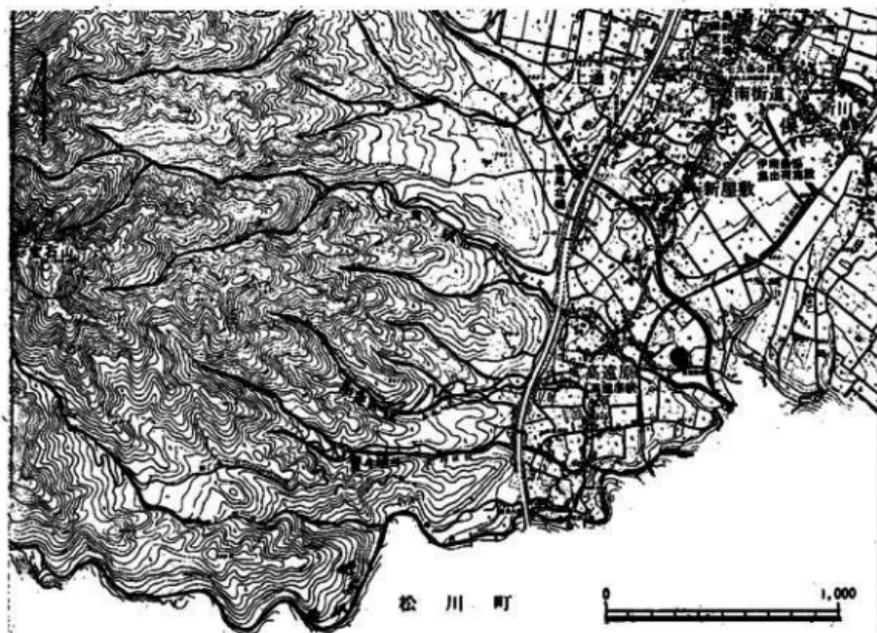


第1図 中原遺跡の位置図（5万分の1）

第2節 地形及び地質

(1) 地 形

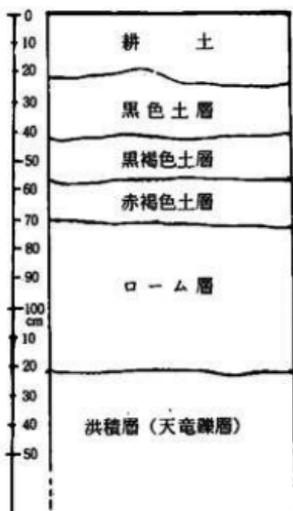
中原遺跡の西は越百山 (2,613m) ・念丈岳 (2,290m) ・烏帽子岳 (2,194m) ・小八郎岳 (1,475m) ・寶石山 (1,256m) など続く山地帯が約7km, その山麓に広がる扇状地と小規模な段丘が連なっている。北の与田切川, 南の前沢川に間に形成された古い扇状地は, 再びこれらの河川とその支流 (日向沢・矢ノ沢) によって浸食が進められた。それに加えて山地帯の隆起運動のため更に傾斜が急になっていて, 開折が進行し砂礫の流出が著しく, 山麓に堆積されて再扇状地が各地に形成された。この古い扇状地に残っている。七久保の南部台地の上面はローム層の強い扇状地である。上段に行くほど新しい扇状地といえる。新屋敷, 高遠原部落などは新しい扇状地である。この新しい扇状地の堆積した後, 火山灰土の堆積が進み, そのあと小河川の浸食が更に扇状地をつくった。



第2図 中原遺跡付近の地形と河川 (1万分の1)

(2) 地 質

七久保地区の地層は主に領家花崗類に属している。烏帽子岳・小八郎岳・宝石山・越百山・南駒ヶ岳等Giは中粒、細粒黒雲母花崗岩である。そのうち烏帽子岳南はGコートランド岩の一部入っている。また烏帽子岳北にGo—大田切花崗岩である細粒両雲母花崗岩、中田切川上流にも大田切花崗岩と縞状片麻岩が混入、念丈岳、越百山、南駒はGd=伊奈川花崗岩が分布している。これらの岩石が七久保の扇状地には堆積している。この扇状地上層には古いロームを含有している。これらの古い堆積扇状地を現在は、日向沢・矢ノ沢・宮の沢・高遠入沢・前沢川などが浸食し下流に沖積地を作っている。これらの扇状地、及び洪積台地に、上面に波田ローム、その下部に小坂田ローム、西林ロームが堆積している。遺跡のほとんどは波田ローム中に発見されている。



第3図 標準序層図



第4図 地質図 a 沖積層・Tg=天竜礫層・G=コートランド岩・Gi=市田花崗岩
Go=大田切花崗岩・Ghb=生田花崗岩 ●=中原遺跡

(3) 歴史的環境

中原遺跡の周辺には下記のような遺跡が分布している。これら諸遺跡の概要を述べるのと次の通りである。

1) 碓物師原遺跡、本遺跡は七久保5138番地～5187番地付近で、昭和40年中央道遺跡調査団が調査した遺跡である。遺物は縄文中期後葉の土器・打製石斧・石皿等が採集されたが、遺構は検出できなかった。

2) 鳴尾天伯遺跡、本遺跡も中央道調査団が調査した遺跡である。遺跡地は七久保4755～4769番地、矢ノ沢川の北岸の小台地に分布する遺跡である。縄文中期中葉～後葉の住居址10軒と土坑36基検出された。中央道の西と東にも遺跡は広がっていると思われる遺跡である。

3) 鳴尾遺跡、本遺跡も中央道用地に当たる遺跡であったので、昭和46年中央道調査団により発掘された遺跡である。遺跡は七久保4752番地、日向沢の扇状地の南岸に当たる遺跡である。遺構は発見されなかったが、縄文早期の押型文土器・縄文中期・縄文後期・土偶・有肩扇状石器等が検出された。

4) 尾越遺跡、本遺跡も中央道用地に当たっていた遺跡である。調査の結果縄文中期中葉・後葉、後期晩期の住居址28軒、配石7基・土坑101基が検出された。また出土遺物は縄文中期勝板式・加曾利E式・加曾利B式・堀之内Ⅱ式・縄文晩期・弥生後期・土師・中世陶器などが発見された遺跡である。

5) 三林遺跡、縄文草創期・縄文中期の遺物が出土する遺跡である。

6) 藤平遺跡、縄文草創期・縄文中期の遺物が出土する遺跡である。

7) 高遠原遺跡、昭和52年県営は場整備によって調査した遺跡、調査の結果縄文中期（加曾利E式）の住居址1軒、竪穴3基、土坑30基が確認できた。鳴尾天伯遺跡に入る遺跡であろう。



第5図 中原遺跡周辺の遺跡図

第三章 遺構及び遺物

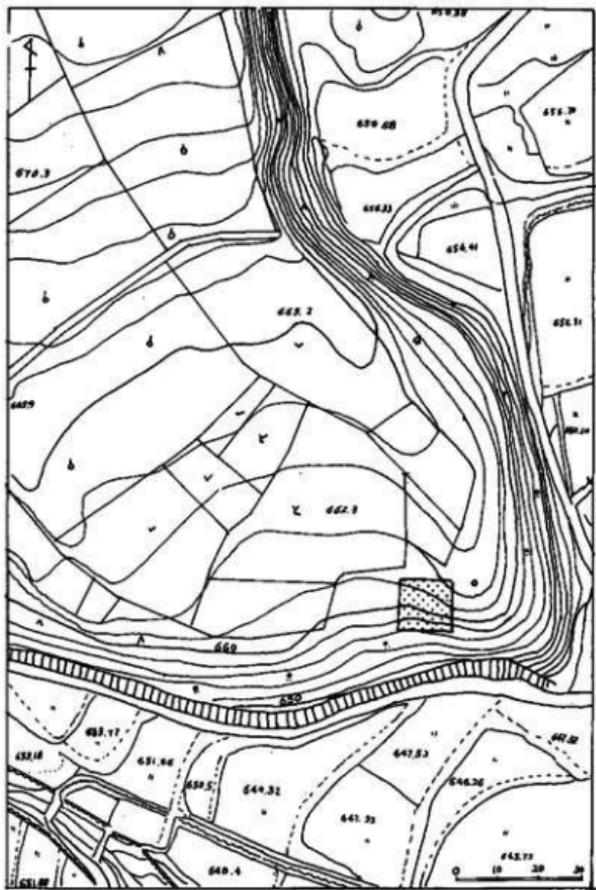
第1節 遺構と遺物

(1) 遺構

中原遺跡は、矢ノ沢と高遠入沢によってさまれた台地の突端部に位置している遺跡である。本遺跡は主に矢ノ沢川の扇状地の東端の東で、地質構造では天竜礫層上、と言っても、実質的には扇状地を構成している西山麓の地質構造である。

詳細に言えば、現在の遺跡は洪積台地であって、上面は礫層の上部に降った波田ローム層下にあることになる。ちょうど、この辺が両扇状地と洪積台地との接点にあたる。

今回発掘の対象となった場所は、中原遺跡の先端部で、この所は耕作地には地形的に不向のところから、果樹園から出た石の集積場となっているところである。中原遺跡と言われてきた遺跡は、これより西国鉄線ぐらい



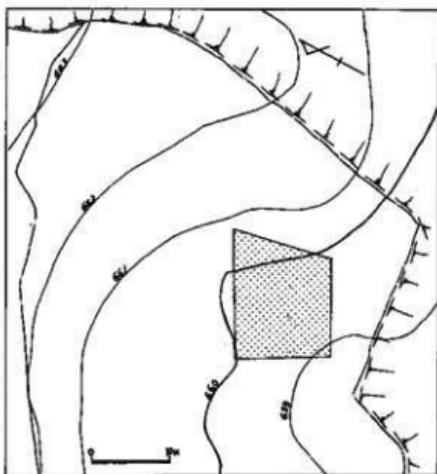
第6図 遺跡周辺の地形図

迄の間を呼んでいる。今迄果樹を植る時など、石囲炉とか焼土など何箇所も発見されていたことから遺跡に指定されていたものである。今回の調査では現地にて採集された中世陶器の出土状況からして、又地形的に台地の突端という立地条件から見て、中世の小居館か、見張所のあった場所ではないかと推定し調査を行なったのである。

中世の掘立建物址

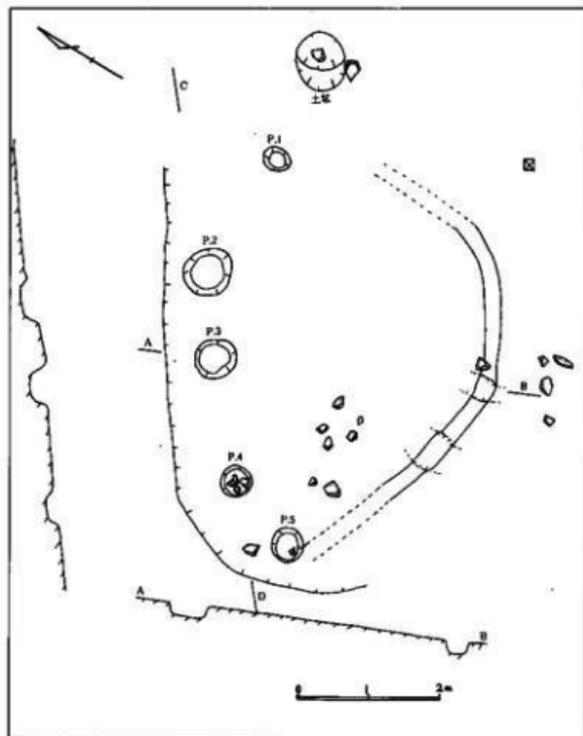
今回の発掘調査で検出された掘立建物址は、鉄塔建設用地という限定された範囲の中であつたの

で、建物址の規模や形態を知ることができ得なかったのが残念であったが、私の中世建物址の調査よりして、先ず、P. 1・P. 2は大きさが70～60cm 略同じくらいの規模で深さも20cm内外、これは柱穴検出面からの計測である。柱間は柱芯真で120cm（4尺）、P. 4は径が45cm円形深さも20cm程、内に4個の自然石を結てあった。こうした例はよくある例である。柱間間隔は1.8m 1間この列は4尺と6尺で建築上は普通ある例である。P. 5は径が50cm深さ20cm円形であるが、ややはずれている。P. 4との間隔は1.2m（約4尺）P. 1はP. 2の東1.8m（6尺）の位置にある柱穴で、

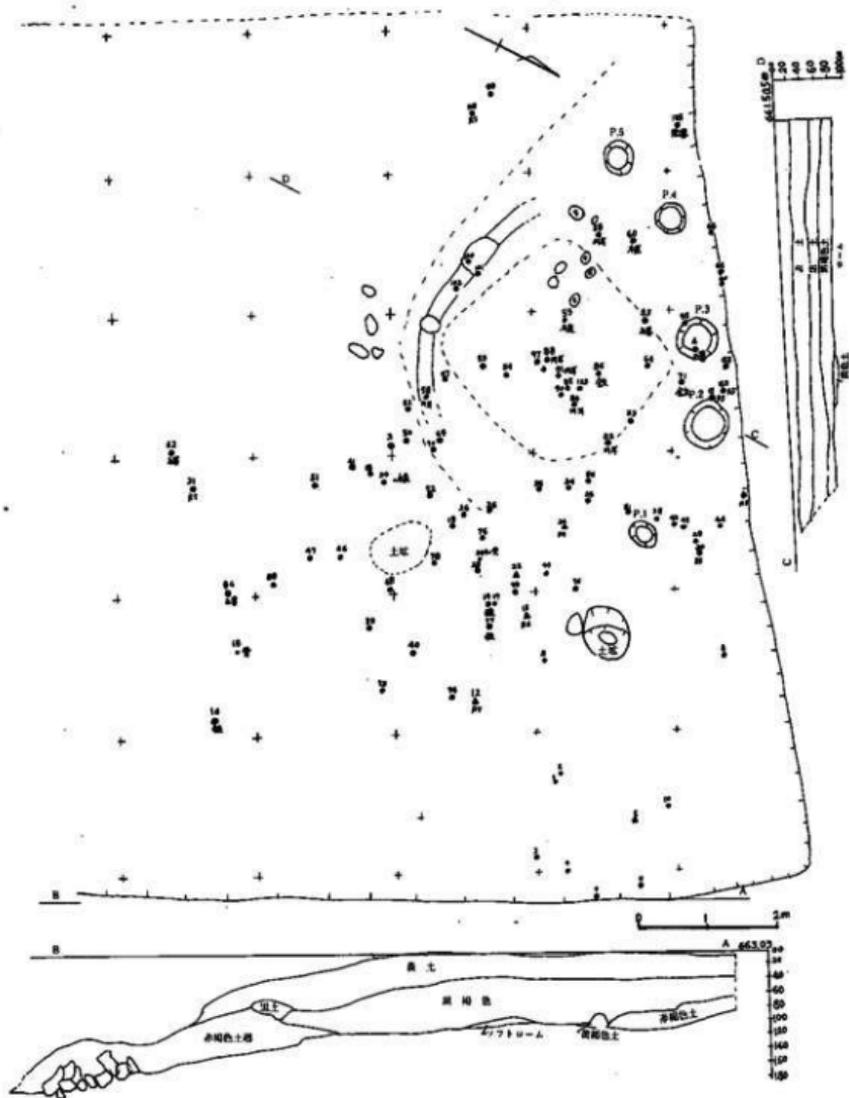


第7図 発掘地点

大きさは40×35cm楕円形 深さは約19cm。その東の土壌と判定したが、あるいは柱穴址かも知れない、P. 1との間隔は1.6～1.7mある。P. 2・P. 1土壌は直線上にあり、まだ用地外に伸びる可能性もある。これら二系列の柱穴址は、これだけをもって如何なる建物址かを判定することは困難であるが、今後の調査の結果によらなくてはならないものであるところから、ここでは柱列である点は確かである程度で、人工的であることはたしかである。



第8図 掘立建物址



第9図 遺物出土配置図

(2) 遺物

図版 3, 4

1. 発掘番号22, 縄文時代早期末繊維を含んだ条痕文系土器茅山上層に併行すると考えている。
2. 発掘番号No.44, 1と同じ系統の土器。3. 発掘番号No.40, 1・2と同じ類に属する土器である。中原遺跡からは今迄の調査では縄文早期の遺物は発見されていない。4. 表採により縄文中期後葉の曾利Ⅱ式に併行する時期の土器と考えられる土器, 土器面が荒れているが, 竹管工具による連続刺突文が見受けられる土器。5. 発掘番号No.10の土器, この土器は小破片で器面が磨滅が多く文様を窺うことができないが, 縄文中期後葉の土器であろう。6. 表採の土器である。この土器も器面の磨滅が多い方の土器であるが僅か綾杉文の一部が見られる。曾利Ⅲ式頃の土器と思われる。
7. 表採による土器, 器面に僅かに浅い斜縄文と一本縷に沈線文が施されている縄文中期後葉加曾利EⅢ~Ⅳ式に比定される土器と思われるもの。8. 表採, 縄文中期後葉の土器片。9. 縄文中期後葉の土器片。10. 縄文中期後葉の土器片。11. 縄文中期後葉の土器片。竹管工具で縷に施文してある。12. 無文の土器器片, 平安時代のもと思われる。

図版 5

13. 発掘番号No.58。この土器は内耳鍋の破片で, 中世末頃のものと考えられる遺物である。14. 発掘番号はNo.90+91で, 接合した内耳鍋の破片である。この土器も13と同じく中世末の遺物と思われるもの。15. 発掘番号, No.83, この土器も内耳鍋の破片で, 口縁部の一部である。16. 発掘番号, No.95, この土器も内耳鍋の底部の破片で, 時期的には中世末と推定される遺物である。17. 内耳鍋の破片, 時代は中世末と思われる。18. 口縁部と底部を欠いている壺形の陶器胴部に一条の沈線文が施された天目軸の中世末期頃の陶器。

図版 6

遺物の出土状態, 上, No.84, No.85, No.90, No.91の内耳土器。中はNo.94内耳鍋の出土状態。下も内耳鍋の出土状態。

図版 7

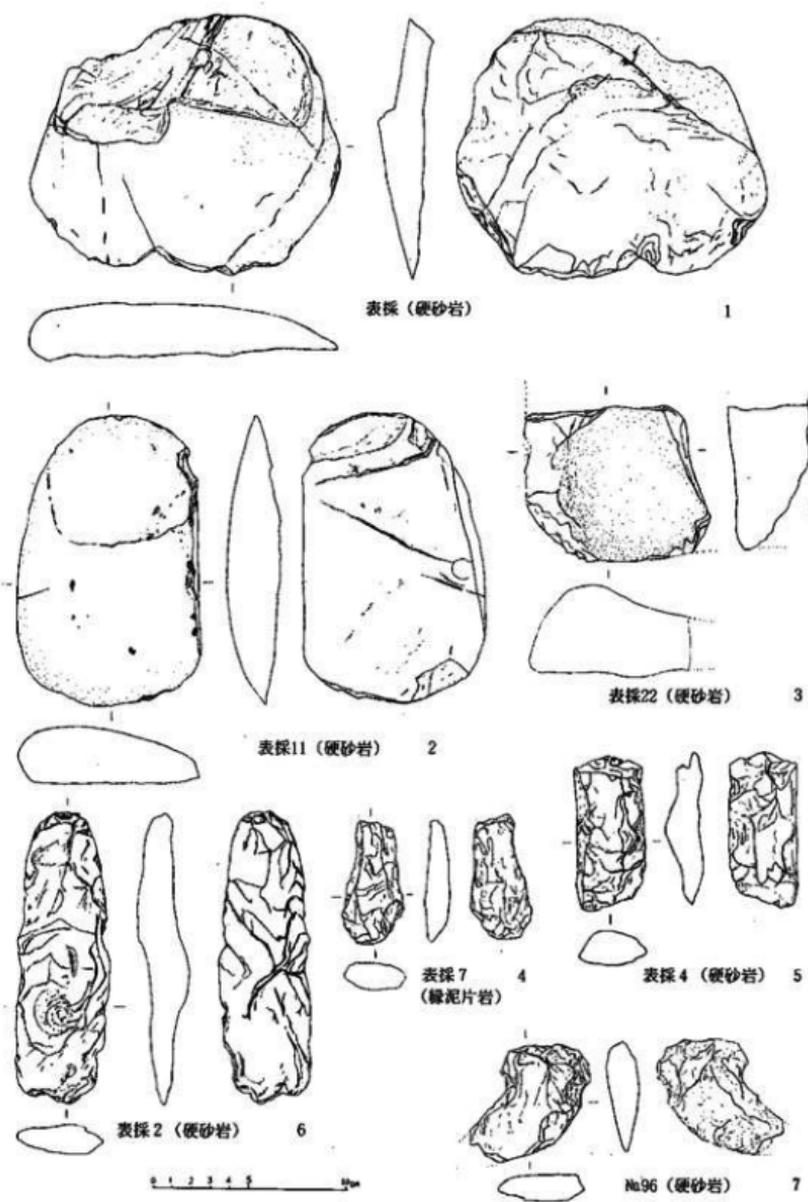
19. 発掘番号No.66打製石斧(硬砂岩) 20. 発掘番号No.4打製石斧(硬砂岩) 21. 発掘番号No.1磨製石斧(緑泥片岩) 22. 発掘番号No.33円形石器(花崗岩) 23. 発掘番号No.2打製石斧(硬砂岩)

押図第10

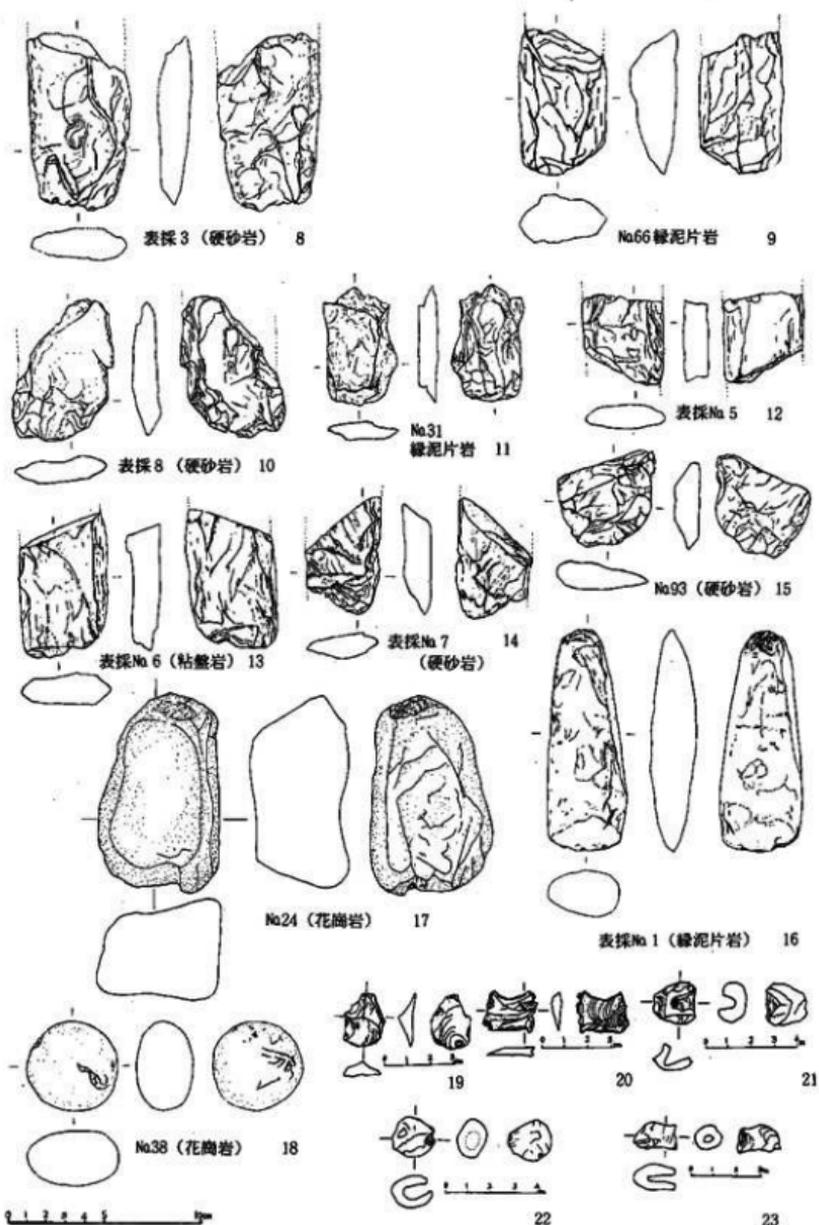
1. は大形の横刃形石器。大きく抉りのある刃部が認められる硬砂岩の石器。
2. は、これも大形の打製石斧。表面が自然面を用いた硬砂岩の石器である。
3. 遺跡地の表面より採集（No-22）。打製石斧の破片。硬砂岩
4. 遺跡地内採集。（記録番号7）、緑泥片岩の小形打製石斧である。
5. 遺跡地内より表採された硬砂岩の石斧である。
6. 遺跡地内より表採された硬砂岩の打製石斧である。
7. 調査No-96、やや厚手の硬砂岩の石匙である。
8. 遺跡地内から採集された（No-3）、硬砂岩製の打製石斧で、頭部が欠損している石器。
9. 調査（No-66）の緑泥片岩の打製石斧、頭部が欠損している石器。
10. 調査（No-8）硬砂岩製の打製石斧である。
11. 調査（No-31）緑泥片岩の打製石斧である。
12. 遺跡地内より表採された（No-5）の打製石斧の破片。
13. 遺跡地内より表採された（No-6）粘盤岩製の打製石斧の破片である。
14. 遺跡地内より表採された（No-7）硬砂岩製の打製石斧の破片。
15. 調査番号（No-93）硬砂岩の打製石斧の破片。
16. 調査番号（No-1）緑泥片岩一部磨製石斧。
17. 調査番号（No-24）花崗岩の磨石。
18. 調査番号（No-38）花崗岩の表面が磨かれた円形石器。
19. 表採による黒曜石の2個所に使用痕をもつ三角形の石鏃形石器。
20. 表採による黒曜石、上下に剝離痕をもつ石器。
21. 遺跡内から検出された馬蹄形の金具。
22. 遺跡内から検出された馬蹄形の金具。
23. 遺跡内から検出された馬蹄形の金具。

第IV章 所 見

1. 今回の調査は中部電力株式会社の送電用鉄塔の敷地建設に伴う事前埋蔵文化財の緊急発掘である。従って極く限られた場所に限定される関係で、中原遺跡東西250m、南北150mの広い遺跡の東端の一部の調査であったため、遺跡の性格を知ることができる調査ではないことを御承知いただきたい。中原遺跡は今迄分布調査などでは、縄文時代前期・中期・後期・弥生時代後期などの遺物が発見された遺跡である。今回の調査で聞いた話では、本発掘場所の北西100m程の果樹園中に石囲炉があったことが言伝えられている。また、西側の果樹園中には焼石などが散布しているところより、集落が存在していたことを窺うことができる。
2. 本遺跡は日向沢と高連入沢の合流地点の西側舌状台地上に立地している遺跡であることより、伊那地方によくある中世居館址が設けられた所ではないかと考えられていた遺跡である。今回調査の一つのねらいは、中世に関係をもつ遺跡として注意して発掘を行ってきたのである。
3. 発掘地点周辺特に北側の一段高い段丘の先端には土壘状の一部かと思われる土手状の一部が見受けられる。また、その内側に僅かではあるが、小高い場所もあり、居館址の一部かとも考えられるが、後世の手も加わっているかもしれない。また発掘地点の西側平坦の場所には内耳鍋などの中世の遺物が散見されるところより、周溝か堀形が存在することも考えられるので、次回の調査に俟つものがある。
4. 遺構、今回調査地点が南東に傾斜変換地点にあるところから、遺構の主体部は西側果樹園に広がっているものと考えられる。従って今回の調査は遺構の東側の一部が検出されたものと思われる。
柱穴址、この柱穴址は規格的ではないので、建物址の性格を知ることができないが、掘立建物址の一部であることは間違いないものと推定している。発掘中に黒色土層の内ではあるが堅く踏固められている場所が認められたが、これも自然的とは考えられないところから、建物址の一部か、それとも中世前か判断し得なかった。また、柱穴址と云ってもごく僅かしか残っていなかったのは、黒色土層中に埋込まれていた関係から、あまり深く残存しなかったかも知れない。いずれにしてもこの付近には、こうした遺構が存在すると思われるので、今後の開発にあたっては注意しなければならない遺跡と思われるのである。
5. 遺物、今回発見された遺物は、以前の分布調査の折の縄文前期とされている遺物を見ていないので詳細は不明であるが、今回は、縄文時代早期末の関東での茅山土層式、関西では粕畑式に比定される土器片、縄文中期後葉の曾利系の土器、弥生後期の土器、土師器、中世の内耳鍋、鉄軸の壺形陶器などと縄文時代の石器の各種、鉄器残片等が出土した。
6. 今回の調査ではお骨折をいただいた中部電力の小原さん、地主の片桐勲・上山秀雄・横山常平さん。教育委員会の皆様をはじめ、発掘に参加されました。片桐修・片桐保男・佐々木敏郎・宮下正美・横田愛子・佐々木光子・宮下きく枝・鎌倉千市・片桐和子・福沢かつ・鎌倉花子・宮下幸子・片桐泰子・鎌倉恒子さん。発掘中は大変お世話様になりました。紙上より厚く御礼申し上げます。



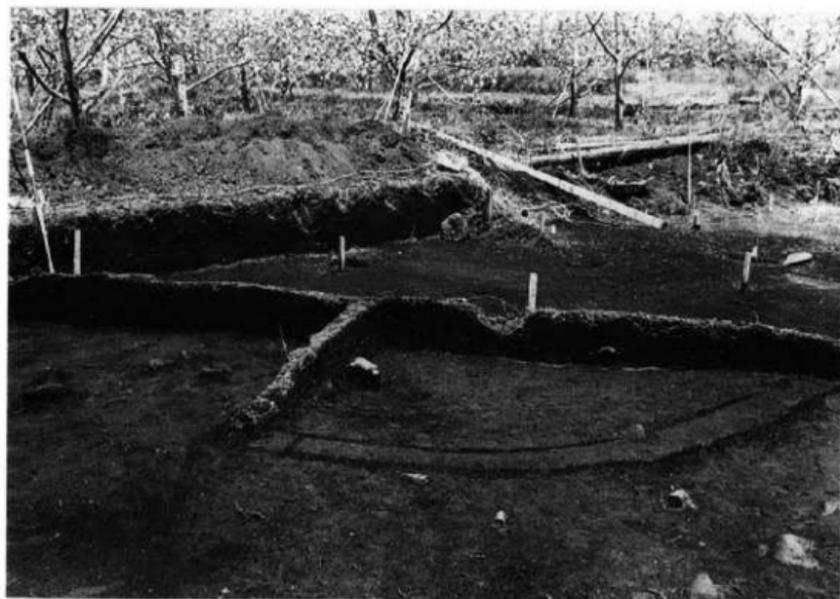
第10圖 1.凹形石斧 2.打製石斧 3.打製石斧 4.打製石斧 5.打製石斧 6.打製石斧 7.石匙



第11圖 8.打製石斧 9.打製石斧 10.打製石斧 11.打製石斧 12.打製石斧 13.打製石斧
 14.打製石斧 15.打製石斧 16.半磨製石斧 17.敲打器 18.投彈



図版1 上・柱穴址 下・柱穴址（南側より）



図版2 上・柱穴址の調査中 下・柱穴址（東側より）



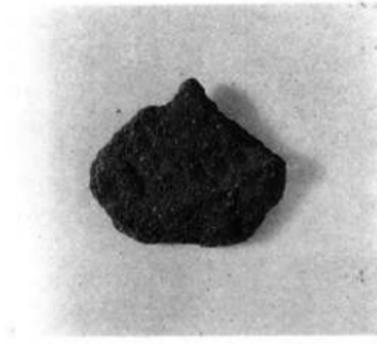
1 (No22)



2 (No44)



3 (No40)



4 (表採)



5 (No10)



6 (表採)

図版3 1. 縄文早期末の土器 2. 縄文早期末の土器 3. 縄文早期末の土器
4. 縄文中期後葉の土器 5. 縄文中期後葉の土器 6. 縄文中期後葉の土器



7 (表採)



8 (表採)



9



10

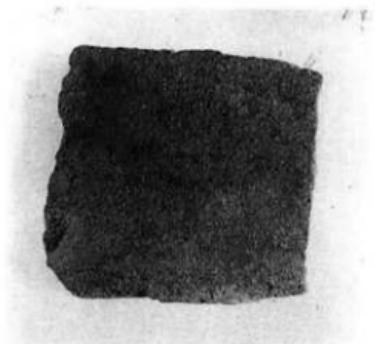


11



12

図版 4 7. 縄文中期後葉の土器 8. 縄文中期後葉の土器 9. 縄文中期後葉の土器
10. 縄文中期後葉の土器 11. 縄文中期後葉の土器 12. 土師器



13 (No.58)



14 (No.90+91)



15 (No.83)



16 (No.95)



17



18

図版 5 13. 内耳鍋 14. 内耳鍋 15. 内耳鍋 16. 内耳鍋
17. 内耳鍋 18. 壺 (天目軸)



No.84. 85. 90. 91 遺物出土狀態（內耳鍋）



No.94 遺物出土狀態（內耳鍋）



遺物出土狀態（內耳鍋）



19 (No.66)



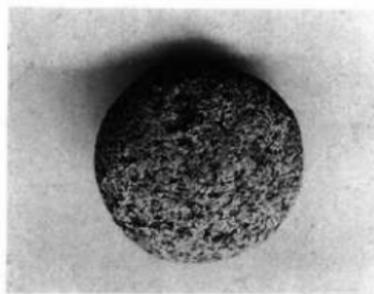
20 (No.4)



21 (No.1)



23 (No.2)



22 (No.33)

图版 7	19No.66	打製石斧	20No.4	打製石斧	21No.1	磨製石斧
	22No.33	円形石器	23No.2	打製石斧		



図版8

上 土城 下 発掘に参加された方々

中原遺跡緊急発掘報告書

昭和61年3月20日 印刷

昭和61年3月25日 発行

発行所 長野県上伊那郡飯島町
教育委員会

印刷所 藤原印刷株式会社

松本市新橋7-21

電話 0263(33)5092㉿
